

令和6年度 東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程学位論文要旨

林立の絵画

—反復のリズム—

令和6年度 東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程
日本画研究領域 学籍番号1322903 三品 太智

私はこれまで絵画制作をする上で、無意識的に「反復によるリズム」を使った表現を行ってきた。本論では、その「反復によるリズム」表現の由来と、創作のプロセスを考察したものである。

その「反復によるリズム」表現には、「垂直線の反復」と「デフォルメされた形態の反復」があり、それぞれ幼少期の二つの体験が影響を及ぼしている。

一つは、幼少期の原風景に発する、私は愛知県の郊外に生まれ育ち、頻繁に遊んだ園地帯に立ち並ぶ送電鉄塔の反復による林立を見て育った。送電鉄塔は発電所から都心へ送電するための道として本来規則的に建設されたものだが、私の遊び場に並ぶ送電の道の数は多く、四方へ伸び、交差することで規則的な並びは緩急のついた反復による林立になっていた。広い田園の中で、巨大な送電鉄塔に囲まれていると、自分の身体の大きさがあやふやになり、仮想の空間へ入り込むような感覚をもった。それは、小さな生き物が地べたをゆっくり歩いている感覚に近似しており、自分が蟻になって散歩しているように感じられた。実際の田園地帯より広く錯覚し、彼方に見える都心のビル群より、送電鉄塔の建ち並ぶ田園地帯に強く魅力を感じていたのである。凹凸の少ない田園地帯に並ぶ送電鉄塔の「垂直線の反復」によって出来た林立は、私にとって仮想的な世界を表すものであった。

もう一つは、幼少期の原体験による、デフォルメによる形態の反復である。私は小学生の6年間、趣味で町の劇団のクラブチームに所属し、大道具や小道具などの舞台道具に囲まれて育った。所属していた劇団で使う道具は、観客席から見やすいように大袈裟に表現されて作られていた。箱馬を集めて作った雛壇や、色や構造がデフォルメされた舞台空間は、簡略化により生み出された、同じ色や同じ角度の「形態の反復」の集合であり、写実的な空間からは遠い見た目であったが、その形態は舞台の場面に合わせ海や山となり、その中で演じる私にとってそれは仮想の世界の箱庭となった。私にとって、「デフォルメによる形態の反復」はもう一つの仮想の世界を表すものであった。

この二つの原体験は、私の絵画表現に多大な影響を与え、モチーフ選択や表現の上で、絶対的な関係性を持っている。

本論文の構成は、3章からなる。

第1章「平野と舞台の反復」では、自身の二つの原体験が、絵画表現に現れる経緯を考察した。第1節では、私が送電鉄塔の連なりを眺めることで受けた視覚影響について、構造物が立ち並ぶことで生じる「林立の反復」と、田畑の広がる「あぜ道の反復」が、私の仮想世界でどのように転換したかを指摘し、送電鉄塔の構造、連続性と地平の広がり、自身の絵画表現のモチーフ選択に影響していることを考察した。第2節では、演劇の舞台上に置かれた、大袈裟な道具たちによる「デフォルメされた形態の反復」が、自身の絵画表現の世界観や表面的なモチーフに強く影響していることを考察し、「デフォルメされた形態の反復」の実作例を挙げた。

第2章「反復するリズムの表現」では、幼少期の体験から自身の絵画制作に影響している

「反復」が自身の作品に表現化されるまでの経緯として、まず第1節で日本美術に見る「反復」表現の作例について説明し、絵画に描かれた反復と更新について考察した。第2節では、主題性を強めるために「反復」表現でフォルムを作り出している画面の作品を例に挙げ、図像の反復、色の反復、マチエールの反復について考察した。第3節では、人の営みの表れとしての「反復」に注目し、人工物と反復の親和性について考察した。人工物の反復と自然物の反復は異なる。同じ形によって生まれる完全な反復は人工物の中にこそあり、自然物の中には無い。完璧に反復されるときは、その反復されるべき原型と、それをならい摸像を作り出す人の知力がはたらく。それ故、精神の無い自然に摸像は存在しない。曲線の連なる山並みも、木に茂った葉の数々も、一つとして同じ形はなく、それらは無数の類似の連続でしかない。一方、抑揚のないテレビアンテナや街路灯などの人工物の反復は、営みの中で劣化していき、自然物より画一的で、真新しい人工物より抑揚のあるリズムになる。自身の作品でも、構造物をモチーフとすることで、人の営みが「反復によるリズム」の表現につながることを考察した。

第3章「提出作品解説」では、1章と2章を踏まえ、第1章では画面の焦点の高さが景色の静動に影響していることを考察した。第2節では自身のモチーフについて述べ、第3節では提出作品について製作工程を踏まえて解説した。

参考文献

- E・パノフスキー『〈象徴形式〉としての遠近法』木田元監訳、川戸れい子、上村清雄訳、筑摩書房、2009年
- ヴァシリー・カンディンスキー『点と線から面へ』宮島久雄訳、筑摩書房、2017年
- テオ・ファン・ドゥースブルフ『新しい造形芸術の基礎概念』宮島久雄訳、中央公論美術出版、2020年
- パウル・クレー『造形思考 上』土方定一、菊盛英夫、坂崎乙郎訳、筑摩書房、2016年
- パウル・クレー『造形思考 下』土方定一・菊盛英夫、坂崎乙郎訳、筑摩書房、2016年
- ルートヴィヒ・クラークス『リズムの本質』杉浦實訳、みすず書房、1971年
- 青山昌文『舞台芸術の魅力』一般財団法人放送大学教育振興会、2017年
- 赤瀬川源平『赤瀬川源平の名画読本』社光文社、2005年
- 川瀬智之『東京芸術大学で教わるはじめての美学』株式会社世界文化社、2024年
- 劇場等演出空間運用基準協議会『舞台技術の共通基礎 公園に携わるすべての人々に改訂版』劇場等演出空間運用基準協議会、2020年
- 送電鉄塔研究会『送電鉄塔ガイドブック』オーム社、2021年
- 早坂優子『巨匠に教わる絵画の見かた』視覚デザイン研究所、1996年
- 早坂優子『構図エッセンス』視覚デザイン研究所、1983年
- 藤原壮督『舞台&芸能 用語解説集』星雲社、2021年
- 布施英利『構図が分かれば絵画がわかる』光文社、2012年
- 中村良夫『風景学入門』中央公論新社、1982年
- 真島光秀『車窓の言葉』世界文化社、2007年
- 前田富士男・宮下誠『パウル・クレー絵画のたくらみ』新潮社、2007年
- 三井秀樹『形の美とは何か』日本放送出版協会、2000年
- 三井秀樹『美の構成学』中央公論新社、1996年
- 吉田夏彦『記号論』筑摩書房、2017年